

取組報告

高野 史朗 (TAKANO Shiro) / 京都教育大学附属幼稚園 教諭

幼児は、遊びや生活の中で、教師や友達とかかわり合いながら学びを深めていきます。コミュニケーションの中でも、例えば「対話」という時、自分と相手が向き合って話し合うという構図がイメージされますが、それには他者の存在への気づきや、自分と相手が異なる存在であることへの理解という、発達の側面が必要となります。幼児期はまさにその発達段階にあります。本園で過去におこなったコミュニケーションをテーマにした実践研究をもとに、具体的な事例から、幼児期のコミュニケーションの様相と、そこで育まれる非認知能力について考えていきたいと思えます。

久保 貴史 (KUBO Takafumi) / 京都市立翔鸞小学校 教諭

本校は令和5年に京都市教育委員会から「幼保小の連携・接続（架け橋プログラム）実践研究事業」の指定を受け、隣接されている翔鸞幼稚園や近隣の北野保育園と共に、幼児・児童だけでなく教職員も共に学びを進めているところです。

「ドキドキ・ワクワクが生まれる教育をめざして～安心 つながり 伝え合うわをつくる～」を研究主題として1年生の生活科や5年生の総合的な学習を主な交流の柱としていますが、距離的な近さを活かして、学習以外の場面でも多くの交流を行っています。この2年間で取り組んできた実践とその成果についてお話しできたらと思います。

中村 一也 (NAKAMURA Kazuya) / 舞鶴市立若浦中学校 教頭

本校は、何事にも当事者意識を持って取り組むことができる生徒、自分のことを自分の言葉で語るができる生徒の育成を目指しています。

これまで教員が中心に行ってきた学校の取組を生徒主体に構成しなおすこと、総合的な学習の時間に生徒自らの興味・関心に基づいた探究活動を行うことを主軸として、生徒の非認知能力の育成を図ってきました。

さらに、授業でも、課題や学び方、授業研究会等を工夫することで、前述の活動を通して身に付けた力を発揮させ、認知能力も一体的に育むことにも取り組んでいます。これらの取組を通しての生徒の変容についてお話しします。

お問い合わせ先：京都教育大学 学術研究支援課 研究支援グループ
電話 075-644-8117 メール kenshien@kyokyo-u.ac.jp

非認知能力を考える 3

— 学びとコミュニケーション —

2024年 12月14日(土) 13:30～16:30 (受付13:00開始)

場所：京都教育大学 藤森キャンパス 共通講義棟 大講義室2

対象者：学校教員、教育委員会関係者、教員養成系大学・学部関係者、学生など

プログラム

- 13:30 開会あいさつ
太田 耕人 (京都教育大学長)
- 13:40 趣旨説明
平井 恭子 (京都教育大学 教授・研究推進室員)
- 13:45 講演 「主体的、対話的で愛のある学び」
講師 平田 オリザ (劇作家・演出家 芸術文化観光専門職大学 学長)
コーディネーター 田爪 宏二 (京都教育大学 教授)
- 15:00 取組報告
高野 史朗 (京都教育大学附属幼稚園 教諭)
久保 貴史 (京都市立翔鸞小学校 教諭)
中村 一也 (舞鶴市立若浦中学校 教頭)
- 16:25 閉会あいさつ
谷口 匡 (京都教育大学 副学長・研究推進室長)
- 16:30 閉会
司会進行 山内 朋樹 (京都教育大学 准教授・研究推進室員)

主催：京都教育大学
後援：京都府教育委員会・京都市教育委員会

太田 耕人 (OTA Kojin) / 京都教育大学長



「非認知能力」を取り上げるのは、これで3年目です。2022年は心理学の視点から「定義や評価」を検討し、2023年は現場の実践から「日々の取組の中でいかに非認知能力を育むか」に迫りました。

今年のテーマは「コミュニケーション」。広い意味で〈対話〉といってよいか、と勝手ながら私は考えています。

「対話」というコトバは多岐に使われます。哲学はソクラテス以来、真理を追究する手だてとして、「対話」を重視してきました。社会構成主義は、人は「対話」を通して関係性によって世界を構成する、と規定します。

ただし、こうした「対話」はどれも、自分と同等の存在である、他者（価値観、主張、立場などが「自分とは違う人」と）を相対することを前提にしています。他者にたいして開かれた態度をもって、働きかけ、働きかけられ、互いに補い合って展開する——それが〈対話〉です。

非認知能力では、協働力・コミュニケーション力・統率力などがその要素として参照されます。〈対話〉がこうした要素の発達と密接に関わるのは自明といってよいでしょう。

教師は他者である子どもと同等の立場で、働きかけ、働きかけられつつ、〈対話〉できているでしょうか？ また、子どもたちの間に〈対話〉が生成するよう導いているのでしょうか？

*

1997年1月、平田オリザ氏は京都に滞在中でした。松田正隆氏の戯曲「月の岬」を演出するため、演劇評論家の私が面識を得たのはそのときでした。

同年秋から、氏は雑誌『本の窓』で連載を始めました。後にそれをまとめたのが、『対話のレッスン』（小学館）です。日本における〈対話〉の脆弱性を提起して、氏の日本語・日本文化論の一つの原点になりました。

四半世紀、氏の上演作品や著書について、私は新聞等に寄稿し、〈対話〉を重ねてきました。批判もしましたが、〈対話〉は「異なる価値観のすり合わせ、差違から出発するコミュニケーションの往復」だとする氏の応対は、いつも穏やかです。オリザさん、本日は講師をご快諾いただきありがとうございます。講演という名の〈対話〉、楽しみです。

♡開催趣旨



平井 恭子 (HIRAI Kyoko) / 京都教育大学 教授・研究推進室員

プロフィール: 専門は、幼児の音楽教育。大学院修了後に公立幼稚園、国立大学附属幼稚園にて保育者として勤務。研究テーマは、うたや身体の動きを使った音楽教育方法や乳幼児の音楽行動にみられるリズム感の獲得過程。2018年4月から2022年3月まで4年間、京都教育大学附属幼稚園長を兼務。監修した視聴覚教材: DVD「音楽的な遊びにみる乳幼児の発達」第一巻～第四巻(新宿スタジオ)。

今、学校現場には、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が求められており、児童・生徒が授業中に対話をする機会が多く設けられるようになりました。対話を通して皆で問題を解決していく強い関係性や、周囲の人から教わるのではなく自分なりの正解を持つことは、これからの社会を生きていく上で非常に大切です。

京都教育大学フォーラムは、2022年度から「非認知能力を考える」というテーマのもと、教育現場でこの脳力を如何に見取り育成していくべきかを探ってまいりましたが、3回目となる今回は、非認知能力の鍵ともいえる「他者との対話」や「コミュニケーション」に焦点をあて、それらの学びとの関連について、話し合う機会にしたいと考えています。今回ご講演をいただく平田オリザ先生は、演劇の手法を用いた教育活動を通じて、子どもたちのコミュニケーション能力の育成に取り組んでおられます。先生のお話からも、非認知能力の理解と育成について有益な示唆がいただけることを期待しています。

本フォーラムが非認知能力に関する教育実践の更なる深まりと発展に貢献できれば幸甚です。

主体的、対話的で愛のある学び

【講師】平田 オリザ (HIRATA Oriza) / 劇作家・演出家 芸術文化観光専門職大学 学長



プロフィール: 1962年東京生まれ。1995年『東京ノート』で第39回岸田國士戯曲賞、2019年『日本文学盛衰史』で第22回鶴屋南北戯曲賞を受賞。2011年フランス文化通信省より芸術文化勲章シュヴァリエ受勲。演劇の手法を用いた多様性理解・コミュニケーション教育にも取り組み、各地での講演、国語教科書にも採用された対話劇ワークショップの授業を行っている。

私が暮らす兵庫県豊岡市では、「演劇的手法を使ったコミュニケーション教育」が市内31のすべての小中学校で導入されている。また京都府内でも与謝野町、宮津市などでコミュニケーション教育の全校実施に向けて、着実な歩みが進んでいる。本講演では、全体を通じて、学習指導要領に掲げられた「主体的・対話的で深い学び」について精査し、コミュニケーション教育との関連性について言及する。

まず私が日頃、公立の小中学校で行っている演劇教育の実践例を紹介し、その意義や注意点について述べる。

次に大学入試改革を切り口に、実践例を紹介しながら新しい学力観について考察を行う。ここでは特に身体的文化資本の地域間格差についても言及し、なぜ公教育の中でコミュニケーション教育が必要となってきたのかを考えていきたい。

次に最新の教育統計を使って、非認知スキルの視点から演劇教育、コミュニケーション教育について、その必要性を論じる。「学力」とは「学ぶ力」であり、「学んだ結果」ではない点を踏まえて、演劇教育、コミュニケーション教育の効用について考える。

最後に「対話」について言及し、授業内で「対話」や「エンパシー」が起きる仕掛け作りについて考察する。

【コーディネーター】田爪 宏二 (TAZUME Hirotsugu) / 京都教育大学教育学部 教授



プロフィール: 博士(心理学)。専門は発達心理学、認知心理学。研究領域は概念や言語と関わった認知的情報処理のメカニズムとその発達に関する実験的研究、認知的個性を生かした教員養成教育、フィールドに根ざした発達の理解と支援に関する研究など。主な著書「認知発達とその支援」(共編者)、「教職エクササイズ 教育心理学」(編者)など。